

本号では、4月中旬から4月末にかけてパリ日本文化会館で実施した事業のうち、サクソフオンの名手である須川展也さんを中心とするコンサートと、4月24日(水)に開幕した大津市歴史博物館と当館の共催による「大津絵—日本の民衆絵画」展について報告致します。

また、会館外で行われた裏千家の前家元 千 玄室(十五代千 宗室) 大宗匠による献茶式についても報告致します。

目次

1. 須川展也リサイタル 2

2019年4月18日(木)にパリ日本文化会館で開催したサクソフォン奏者である須川展也さんとピアニストの小柳美奈子さん、そして若手サクソフォン奏者である中島諒さんによるコンサート。

2. 「大津絵—日本の民衆絵画」展 3~6

開幕前日の4月23日(火)に行われた「大津絵—日本の民衆絵画」展のプレス内覧会と講演会、およびレセプション等の模様。

3. 【館外催し】裏千家前家元 千 玄室大宗匠による献茶式 7~8

裏千家千玄室大宗匠による2019年4月15日(月)にユネスコ本部で行われた献茶と、4月16日(火)にヴァレ・オ・ルー植物園で行われた茶室の除幕式の模様。

① 須川展也リサイタル

2019年4月18日(木)にパリ日本文化会館小ホールで、サクソフォン奏者である須川展也さんとピアニストの小柳美奈子さん、そして若手サクソフォン奏者である中島諒さんによるコンサートを開催しました。

須川展也さんは、世界的に有名なサクソフォン奏者で、日本の交響楽団やBBCフィルハーモニック、フランス共和国衛兵隊交響楽団など、日本だけでなく欧州や南米でも演奏活動を行ってきました。須川さんが創作した多くの曲がサクソフォンの世界的な演目となっています。叙情性を加味した見事な演奏技術で定評があり、聴衆を魅了してきました。

小柳美奈子さんは、須川さんの奥様でもあります。豊かな感受性とあらゆる音楽家と協奏できる柔軟性も兼ね備えたピアニストで、世界中で演奏活動をしています。

中島諒さんは、1992年生まれで、東京藝術大学で須川展也さんに師事した後、ヴェルサイユとパリのコンセルヴァトワールで技を磨き、2014年第31回日本管打楽器コンクールサクソフォン第一位、その他国内外の多くのコンクールで入賞した若手ホープです。東京都知事賞、文部科学大臣賞を受賞しています。

演奏曲目は前半がバッハの「ガボットとロンド」、坂本龍一の「ファンタジア」、吉松隆のサイバーバード協奏曲より第一楽章「彩の鳥」、ドビュッシーのサクソフォンとピアノのための「狂詩曲」、後半が長生淳の「パガニーニ ロスト」、ファジル・サイのサクソフォンとピアノのための組曲Op.55の第1、第2、第4楽章、石川亮太の「日本民謡による狂詩曲」でした。どれも素晴らしい演奏でしたが、特に印象深かったのは最後の日本民謡をアレンジしたラブソディーで、たゆたうように繰り返す、ソーラン節の美しい旋律が心地よく胸に響きました。



演奏中の右から須川展也さん、小柳美奈子さん、中島諒さん

② 「大津絵—日本の民衆絵画」展

「大津絵—日本の民衆絵画」展がパリ日本文化会館日本式3階展示ホールで始まりました。会期は4月24日(水)から6月15日(土)までです。本展は日本とヨーロッパにある大津絵80点と彫刻や関連書籍など計120点からなり、フランスで開催される初めての大規模な大津絵展となります。丸紅株式会社の特別協賛と日本航空やパリ日本文化会館支援協会等の協力を得て実現しました。

大津絵は17世紀から19世紀半ばまでの江戸時代に東海道大津の宿、逢坂の関のほとりで絵師たちが仏画や風俗画を描き、旅人たちのお土産品として売られ人気を博しました。「大津絵は上手か下手か知れぬ也」という川柳(誹風柳多留)にあるように、素朴で簡略化した描法は近代の内外の芸術家や識者を虜にしました。

例えば、本展にも出品されているように歌麿や国芳といった浮世絵師、富岡鉄斎などの文人画家も自分たちの絵に大津絵の主題を直接採り入れたりしていますが、フランスで印象派の技法を学んだ浅井忠や山下新太郎、梅原龍三郎等の画家たち、あるいは藤田嗣治も大津絵をコレクションしたり、評価したりしていました。彼らは表現主義ないしフォービスム(野獣派)の画家マチスやルオーの絵に大津絵に似た味を見出しています。

また、ヨーロッパの近現代巨匠芸術家たちも早くから大津絵に注目していました。本展では、ピカソが所蔵していた天敵との酒盛りを擬人化した大津絵「猫と鼠」や、スペインの彫刻家エウダル・セラ旧蔵のミロが好んだという「為朝」なども展示しています。

本展に出品されている大津絵に描かれた主題は、鬼にしても動物や弁慶にしても、かなりデフォルメされていて、ユーモラスなため、どこことなく現代のマンガや「ゆるキャラ」に通じるところがあり、大人から子供まで楽しめる内容になっています。



展示会場

★内覧会

一般公開前日の4月23日(火)に内覧会が実施されました。午前中は報道関係者向けの内覧会でしたが、来場した30人ほどの参加者は、本展のフランス側コミッショナーであるクリストフ・マルケ国立極東学院 教授・学院長による解説を聞き、メモをとりながら熱心に鑑賞しました。



マルケ氏(中央)の解説を聴く報道関係者たち(手前左から二人目は越直美大津市長)



マルケ氏(中央奥)の解説を聴きながら鑑賞する報道関係者たち

★講演会

その後、地上階小ホールで本展に関連した講演会が開催されました。筆者と越直美大津市長の挨拶の後、本展共同コミッショナーであるクリストフ・マルケ氏（前述）と大津市歴史博物館学芸員の横谷賢一郎氏に、京都精華大学の特別研究員・非常勤講師の鈴木堅弘氏、バルセロナ自治大学非常勤教授のリカル・ブル氏を加えた4人の講師が、それぞれの専門的視点から大津絵に関する興味深いプレゼンテーションを行いました。聴衆の中には大津絵を初めて目にした人も多く、講師たちの話に熱心に耳を傾けました。



藤娘姿のペコちゃんを例に大津絵と「ゆるキャラ」との関係話す横谷氏（左端）
（壇上は左からマルケ氏、鈴木氏、ブル氏）

★レセプション

講演会終了後は日本式6階に場所を移して、レセプションが開かれました。そこには木寺昌人駐仏日本大使ご夫妻、越直美大津市長、シル・ペクー・イルドフランス兼パリ大学区長ほか、テラスにはみ出すほどの大勢の方々が参加しました。



レセプション風景

★大津市プロモーション展示と大津絵制作の実演

また、地上階ホールでは本展に協力頂いている大津市の魅力を発信する展示と五代目高橋松山氏制作の大津絵の展示も始まりました。特に、内覧会当日と翌一般公開日初日には本展に併せて来仏した五代目高橋松山氏による大津絵の制作過程を示す実演が披露され、沢山の人が興味深げに見入りました。



地上階ホールの大津市プロモーション展示（左）と制作過程を実演する大津絵師・五代目高橋松山氏（右）

★地下鉄駅に張り出された大津絵展のポスター



地下鉄駅に張り出された大津絵展のポスター（左は4月25日モット・ピケ駅。右は5月2日パッシー駅で撮影）

★子ども向けツアーを実施

当館では未来を担う子どもたちを対象とした事業にも力を入れています。その一環として、5月2日（木）の昼過ぎに大津絵展への子どもを対象としたツアーを実施しました。

担当したスタッフによれば、雨模様の中、先生とともに参加した7人の子どもたちは、特に鬼の絵や大津絵のキャラクター・フィギュア、そして会場に設置した大津絵の制作過程を示したビデオに興味を示し、楽しんでいただいていたということです。筆者も、子供たちが展覧会見学後に当館広報スタッフが作成した独創的な子ども用パンフレットにあるクイズやお絵かきに興じている姿を目にしました。今後も子供向けツアーを会期中に数回実施する予定です。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一の見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

③ 【館外催し】 裏千家前家元 千 玄室大宗匠による献茶式

2019年4月15日(月)、国連ユネスコ親善大使でもある裏千家前家元 千 玄室(十五代千宗室)大宗匠による平和祈念献茶式がユネスコ本部内のイサム・ノグチ作庭の日本庭園で行われ、山田滝雄ユネスコ日本代表部大使の挨拶に続き、オードレ・アズレー ユネスコ事務局長が挨拶に立ちました。風が強く寒い日でしたが、96歳の大宗匠は寒さも風も気にせず背筋をまっすぐに伸ばした凛とした姿勢で献茶のお点前を披露しました。式典にはセルビア大使、ナイジェリア大使、ユネスコ親善大使で芸術家のセツコ・クロソフスカ＝ド＝ローラさん、在仏日本国大使館の樋口義広次席公使等30人ほどが参加しました。



パリのユネスコ本部庭園で挨拶するアズレー事務局長(左)と献茶をする千玄室大宗匠(右)

翌4月16日(火)にはパリ南郊外オー＝ド＝セーヌ県にあるヴァレ・オ・ルー植物園で茶室の扁額除幕式と献茶が行われました。同茶室は「清友庵」と呼ばれ、1985年に裏千家から在仏日本国大使館広報文化センター開設に併せて寄贈された2畳間大のものですが、1997年のパリ日本文化会館開館に伴い、2007年に同センターが閉鎖されたことから、しばらく大使館倉庫に保管されていました。それがこのほどヴァレ・オ・ルー植物園の温室内に移築されたのです。その除幕式に裏千家の千玄室大宗匠が参加し、その後献茶が行われました。この茶室はパリ西郊外にあるアル＝ベール・カーン美術館の改修工事が完了次第同所に再移築される予定と聞いています。式典には木寺昌人在仏日本国大使ご夫妻、パトリック・ドゥビジャン オー＝ド＝セーヌ県会議長、ジョルジュ・シフルディ シャトネー＝マラブリ市長ほかが参加しました。

「清友庵」に隣接して盆栽園があり、見事な 66 点の盆栽を鑑賞することができます。もともとレミー・サムソンという盆栽好きのフランス人が所有していたものですが、2013 年に県営の同植物園に寄贈（一部購入）されたのだそうです。



「清友庵」の扁額除幕式（左）と「清友庵」で献茶のためのお点前をする千玄室大宗匠（右）

なお、ヴァレ・オ・ルー植物園は 13 ヘクタールほどの広さがあり約 500 種類の植物が生育していますが、ヴァレ・オ・ルー植物園の入り口から「清友庵」に向かう途中に“しだれ青杉” (*Cedrus atlantica* 'Glauca Pendula') という巨木が池の畔に生えています。直径 2 メートル近い巨木で、枝を張った広さは 680 m²にもなり、八方に太い枝を広げた様はまさにファンタジーの世界にある神木のように、荘厳な雰囲気醸し出しています。一見の価値があります。



ヴァレ・オ・ルー植物園内にある巨木・しだれ青杉

以上